



千葉大学医学部同窓会報 第57号(再刊号)

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線208

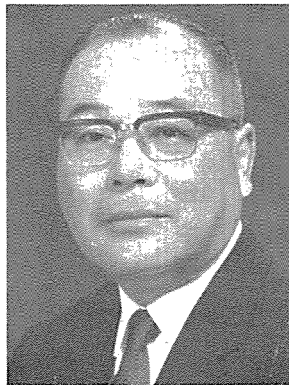
題字 鈴木五郎

同窓会長を引継ぐに当って

千葉大学医学部るの は な 同窓会長

大塚 文郎

このたび、私はるの は な 同窓会長を引継ぐことになりました。学識豊かで、経験も深く、また人柄も温厚な前会長鈴木五郎先生の後釜としては、およそそれとは全くと言ってよい程に対照的な私がその座を襲うことになりました。については、私は果してその任に堪え得るかどうかを、心ひそかに憂えると同時に、その責任の重大なことを痛感しています。私はまず、今日までの長い間、多難な路を辿ってきたるの は な 同窓会のために、歴代の会長、理事、評議員等の役員の方々はもとより、会員の皆さん方が、並々ならぬご努力を尽されたことに對し、心から感謝の意を表する次第であります。



私は、この皆さん方のご尽力とご功績とを無にすることなく、この基盤の上に、わが同窓会の発展と拡充の一駒を積み重ねてゆきたいと念願してやみません。それは、一休何の為でありましようか。ご承知の通り、今日の情報化時代には、情報の提供、収集交換などによる正しい認識と、確かな判断と、適時適切な措置とがなければ、現代人の生活としては

一日も過すことができないと言っても過言ではありません。今日私共医師達が置かれている社会環境はもとより、また取巻かれています社会情勢はまことに厳しく、峻しく私共の命運さえ左右しかねないものが多々あります。殊に、従来長く国民の間に定着

される係争があまりにも多いのに驚くではありませんか。会員の皆さん、これらの冷厳な現実をどう受けとめておられますか。

こうした異常事態に曝されながら、よく医師としての自主性を失わないうで、良識の下に、誤りなく対処するには、その拠点として情報収集、交換の場を得ることが先決であります。この場としては私共にとつては、同窓会が最もふさわしいのではありませんか。それは、同窓会が最もふさわしいのであります。そこには親近感と友情とが自ら漂って、最も身近に在る話し合いの場となり、また容易く情報が得られる場にもなるからであります。

従いまして、同窓会がこうした面からみても、大きな役割を果たして、その存立が見直しされ、再検討されるべきであります。もとより、この情報は単に医学医師に限られることなく、また医師としての関連事項に終始することなく、社会人として生きる上についての、社会の各分野に亘る事実を網羅することはもちろんであります。同窓会はこのような情報

昭和五十年秋の叙勲

- 勲三等旭日中綬章 渡辺 進 (成田赤十字病院院長・昭和五十年卒)
- 勲五等双光旭日章 宮田量之助 (下館市・大正元年卒)
- 勲五等瑞宝章 小柳仁吾 (君津市・大正二年卒)
- 町田靖雄 (東京都・大正九年卒)
- 三瀬守三 (大洲市・大正七年卒)

交換の場となつて、結局は会員相互の真の親睦も生れ、良識も養われ、向上発展も期待されて終局的には、母校と表裏一体の実を挙げることができるとはありますまいか。こうしたその機能に思を致すとき、会員の私共は、その一人一人が内容の充実に尚一層の力を注ぐべきであります。

私は、このたび母校の創立百年を迎えましたが、これを契機として同窓会の新たな出発点として名実共に立派な同窓会とすることがその百年の歴史に應える所以ではあります。他方この百年を記念して、多年待望の同窓会館の設立が、同窓会の記念事業として定められていますが、私は今後この方面にも、大いに努力する考えであります。会員の皆さんのご理解とご協力とで、この計画が実を結ぶことは私の悲願とするところであります。

終りに臨みまして、皆さんの御健康と御活躍とを祈つて私の御挨拶といたします。

(昭和五十年十一月一日)

医師国家試験専門委員会設置

厚生省は医師国家試験問題作成にあたって「ガイドライン」を作するため「医師国家試験専門委員会(常任委員会)」を設置。昨年十月三十一日初会合を開いた。本学関係の委員は左記の通り、香月秀雄(千葉大学医学部長・試験委員長)北村 武(千葉大学教授・耳鼻咽喉科)本間三郎(千葉大学教授・生理学)

るの は な 同 窓 会 役 員

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|--------------|------------|------------|------------|-----------|------------|--|
| 名誉会長 | 花岡和夫 | 谷川久治 | 鈴木五郎 | 大塚文郎 | 小林金市 | 嶋田宗之 | 松本 胖 | | | | | | | | | | | | | | |
| 会長 | 花岡和夫 | 谷川久治 | 鈴木五郎 | 大塚文郎 | 小林金市 | 嶋田宗之 | 松本 胖 | | | | | | | | | | | | | | |
| 副会長 | 花岡和夫 | 谷川久治 | 鈴木五郎 | 大塚文郎 | 小林金市 | 嶋田宗之 | 松本 胖 | | | | | | | | | | | | | | |
| 常任理事 | 内田佐造 (昭7) | 窪野 進 (昭10) | 高木良雄 (昭10) | 永井義三 (昭10) | 北村 武 (昭13) | 伊藤健次郎 (昭15) | 田那村保 (昭16) | 井出源四郎 (昭19) | 国井光智 (昭21) | 斎藤 弘 (昭21) | 有益 忍 (昭22) | 今井 力 (昭22) | 伊東宏一 (昭23) | 萩原弥四郎 (昭23) | 越川 衛 (昭23・専) | 木村 康 (昭24) | 村山 智 (昭26) | 鍋谷欣市 (昭27) | 佐藤健雄 (昭6) | 藤平 健 (昭15) | |
| 会計監事 | 藤平 健 (昭15) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
- るの は な 同 窓 会 報 ・ 新 編 集 部
- 村山智 (編集長・薬理) 鍋谷欣市 (副編集長・杏林大・外科) 斎藤弘 (国立千葉病院) 萩原弥四郎 (脳研) 稲垣義明 (三内) 奥井勝二 (一外) 金子敏郎 (耳鼻咽喉科) 増田善昭 (三内) 徳永敬 (第三解剖)

るの は な 同窓会役員会

— 前会長を慰労して —

昭和五十年十一月八日(日)午後四時から、大塚新会長による第一回の役員会が千葉市で開かれた。この役員会は六月に行なわれたのはな同窓会総会の決定に従い、前会長鈴木五郎先生の永年のご労苦に感謝し、ご慰労申し上げることを主旨としたもので、臨時總會をかねて催されたものである。

会場は、田那村常任理事のお世話で、千葉駅前ニューナラの八階特別室、中央に立食用の「浜田屋」の料理、四囲には椅子が多数置かれて、セレモニーにも宴会にも役立つように準備されていた。定刻前後には谷川・三輪両名誉教授、神奈川の安孫子支部長、埼玉の上川名誉支部長をはじめ、東京・千葉・市内からの役員が続々と集まり、五十名を越す盛況となった。

会には有益・伊東常任理事の司会で始められ、まず大塚新会長から、バイタリティーと謙遜と熱意のこもった挨拶があり、前会長とはまた違った形での名会長ぶりを示された。ついで議事に入り、鈴木前会長を名誉会長に推薦する件が提案され、満場一致で可決した。その他役員からの忌憚のないご意見をという新会長の希望により、簡井理事が立って、るの は な 同窓会のさらなる発展のための提言をされたが、その中で、今回の新旧両会長の交代に当って、手続上や不備の点があったのではないかと

との疑義が出された。

このような会では欠かすことのできない名物男になっている井出常任理事があいにく外遊中なので、萩原常任理事が代って、①会長交代の件に関しては、前後三回の常任理事会の議を経て、総会に議案として提出、承認されたもので、手続上の遺漏はないこと。②当日總會に引続き、千葉大学医学部百周年記念行事が行なわれるため、細部にわたるその後の処理は、常任理事会に委任されたこと。などが説明され、それが今日の役員会につながっていることが明らかに

東京るの は な 会新年会の記

昭和五十一年東京るの は な 会新年会は一月二十四日、お馴染みの銀座東急ホテルで、相磯学長、松本教授、大塚文郎全国るの は な 会々長、同じく小林金市副会長をお客様にお迎えして開催された。

千葉より多数の教授に出席していただく予定でしたが、御多忙のため御欠席の方が続出してまことに残念であった。しかし会員四十八名の御出席を得て、旧交を温め合いながら、美女のサービスで酒を酌み交して楽しい一夜を過ごすことができた。

新年会のこととして早急に協議すべき議題もなく、久保田副会長の司会で宴会がすめられた。嶋田

された。

ただし、同窓会報の欠刊等もあって、その委細の周知には手落ちがあり、また新役員への就任依頼等も、新旧会長引継ぎの移行期のため未だ行なわれなかったもので、本日の通知に不審を感ぜられる方があったりした事に対する反省も行なわれた。いづれにせよ簡井理事の前向きな発言によって、同窓会の結束はいよいよ強まることとなった。

新名誉会長への記念品の贈呈、新名誉会長の挨拶があった。本役員会の行事は終了し、ついで懇親会に入つたのは午後五時一寸過ぎるるの は な 同窓会の大きな目的である会員相互の親睦は、ここに遺憾なく発揮され、六時半すぎ和気あいあい裡に散会した。(萩原)

など著実に千葉大学が充実されて

いる模様がうかがわれた。松本教授は長年にわたって精神科の教授の重責を全うされて本年退官され、特に新設の看護学部長として新任される旨の御挨拶があった。精神科の教授として精励される傍ら同窓会副会長として、また病院長として幾多の業績を残され、また退官後も新しい看護学部の創設に御尽力になることに對して、出席全員がその御芳苦に感謝し、今後の御健康を御活躍をお祈り申し上げた。当日の最年長の小野慶三先生の音頭で乾盃があり、祝宴は山海の珍味を囲んで、全員和気愛々のうちに夜の更けるのも忘れて盛大に進められた。

最後に小林金市先生の励ましの言葉とともに万才三唱があり、楽しい新年会を閉会しました。本年の新年会をかえりみて、組織の強化と同時に事業の進め方が話題の中心になっていた。同窓会の発展のために事業の選択と事業

お知らせとお願い

1、会費納入について

昭和五十一年二月末日現在において、会費の収入状況は予定の約半分をわずかに越えた程度です。会計年度は三月三十一日でございますので、未納の方には折り返しご納入下さるようお願い申し上げます。なお、会費二千元は千葉大学医学部創立にかかわる

2、名簿の発行について

本年度限りのもので、次年度はまた平年通りの千円となります。三年毎に名簿を改めることになつて居り、新名簿については昨年来、木村、伊藤、窪野、国井各常任理事および事務局において、鋭意旧名簿の訂正に努めてまいりましたが、この度、ほぼ原稿が揃い印刷所に手渡す段階となりました。

印刷・校正等の時間を勘案すると四月にはお手許にとどけることができそうです。新名簿はB5版三四頁前後のものとなり、一部千五百円でおわちすることができ

ます。予算の関係から名簿の発行には予約制を取らしていただくことが望ましく、会員各位のお手許にはすでにお申込用のカードが届けられてお存じです。そのカードをご利用の上、お申込ならびに送金下さるようお願い申し上げます。



会場風景



を通じて、共通の理解と共通の場を持つていただくことが重要な点であることが強調された。東京るの は な 会を例年の統計からみても案内状八〇〇通、返信数二五〇、二八〇通、そのうち総会出席者数が五、六十名であることが、低調であると指摘されるが、二五〇名から返信を頂戴していることは会の運営や事業内容如何では御協力いただけることを物語っている。

殊に東京るの は な 会として大塚新会長を強く御推挙した経緯を考慮してみても、今後共一層の御協力をお願いする次第であり、同時にその責任をも負担しなくてはならないものと考えられる。(伊東宏二)

創立以来百年を閲する本学はすでに多数の俊秀を全国各地の大学・病院等に送っているが、近年新設大学の急増に伴い多くの人材がこれら各大学に着して、その創設・運営に重要な役割を果している。大塚新会長はその就任の抱負のひとつとして、このような本学の外への発展の姿を、会員各位とともに喜びたいとの意向を示された。

そこで本編集委員会は新しい企画として、各地病院や新設大学で活躍していらる会員の方に、その状況を紹介していただくことにした。手はじめに編集委員でもある鍋谷欣市教授に、杏林大学医学部の紹介をお願いすることとし、また福岡誠吾千葉県がんセンター長に活動のありさまを書いていただいた。今後この企画の続行が多少ともお役に立つことを期待している。

(編集部)

千葉県がんセンターだより

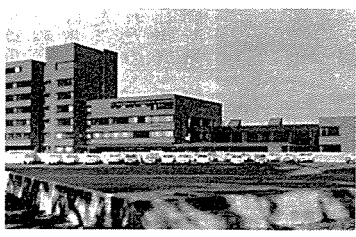
センター長 福岡 誠 吾

近年における千葉県の急速な発展にともない県人口もすでに四百万人を越える有様ですが悪性腫瘍による死亡者数も年間四千人を越えがんと対策はますます重要な課題となっております。

このような状況の中で千葉県がんセンターが発足(昭和四十七年十一月一日)して三年余になりましたが、五十六名(含研究所)の医師を先頭とする約三百名の職員、努力のお蔭で、日常の診療は勿論基礎的、臨床的研究もほぼ軌道にのってまいりました。

そもそも、がんセンターは千葉県が企図するがん対策の中核的な存在として、その推進力になるべく設けられたものであります。その主たる役割を具体的に示しますと次の五項目があげられます。

(1)がん患者の診療及びがんの基



がんセンター 前景

(2)がん登録によるがん患者の実態把握
(3)がん検診態勢の確立
(4)専門技術者の研修、養成
(5)広報活動

以上のような目的の達成にはがんセンターのみの力では到底不可能でありまして、すべての医療関係

者、行政担当者、さらに一般の方の力の結集がぜひとも必要であります。

この中でがん登録につきましては従来のがん患者届出制を改め、がんセンター(疫学部)に中央登録室を設け、県医師会、医療センター、衛生部との緊密な連携の下に実務一切を行なう態勢が作られました。この新方式は本年一月一日を期してスタートいたしましたので何とぞ御協力を頂きたく御願ひ申しあげます。これについて「千葉県がん登録の手引き」を作り医師会を通じて県下の全医療機関にお配りしておりますが、なお部数に余裕がありますので御希望の方は御申し出下さい。

登録制に次ぐ施策として、検診態勢の確立は最も重要な課題であつて、実施が急がれているのでありますが、いろいろ困難な経済的あるいは政治的問題がありまして発足にはなお相当の時日を要すると思われまふ。

専門技術者の研修養成ということでは、すでに医師会と協力して医師のがん研修を行ない、その他細胞診スクリーナーをはじめとする臨床検査技術や看護婦の研修も定期的あるいは随時行なっております。

また千葉大学の関連病院として臨床各科を中心とする医師の交流研修、あるいは一部学生のベッドサイドティ칭ング等も行なっておりますが、今後ますます関連病院としての大学との協力態勢を推進していく考えであります。

かたい話ばかりになつてしま

ましたが、当センターも御多分にもれず看護婦の不足に悩んでおります。しかし何とか二一八体制等働きやすい条件を維持し、患者さん達からも心から感謝されるような立派な看護態勢を作ろうと努力しております。がんセンター発展の推進力になつていくのは何と云つても医師団の有機な協力態勢であります。この点比較的年代の若い人達ではありますが、非常に真面目な献身的努力をしてくれていることを高く評価したいと思ひます。

杏林大学医学部だより

杏林大学医学部教授 鍋谷 欣 市

杏林大学は、昭和四十五年に秋田、北里、川崎の諸大学とともに新設されたもので、この春には第一回の卒業生を送り出すことになつてゐる。ゐるはな同窓会との主な関係人事についてみると、薬理学の小林龍男教授(昭7卒)が基礎医学の重鎮として迎へられ、付属医学研究所の所長も兼ねておられるが本春三月に定年退職される麻酔学の神山守人教授(昭32卒)も創設期から、若手教授の一人として活躍されてゐた。その後、昭和四十七年には、生理学の渡部士郎教授(昭26卒)が赴任され、また昭和四十八年からは、外科学教授として鍋谷欣市(昭27卒)が赴任した。

杏林大学は杏林薬品とは何ら関係がなく、現松田進理理事長の経営にかかると東京三鷹新川病院が前身で、医の倫理に徹した優れた臨

最後に現下の経済不況の嵐は県財政をも危機にさらしております。こういうところからも年間十二億円の一般会計から繰り入れ(赤字)を要するがんセンターの運営に對して、世評はなかなか厳しいものがあります。しかし当センター設立の趣旨に沿つて、赤字を補ふつて余りあるよう、その機能を十分に発揮したいと努力しておりますので、この点大方の識者の適正な御批判と共に御理解と御支援をお願いいたします。

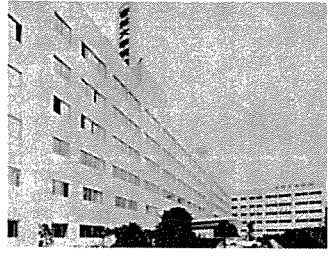
(筆者は昭19卒)

設備ではなく開拓する人に在るものと信じてゐる。

現在のゐるはな同窓会は、前記記四教授の他に、関隆助教授(昭24卒)、小児科学舟橋満寿子助手(昭43卒)、花岡建夫助教授(昭33卒)、小野沢君夫講師(昭35卒)、滝川弘志助手(昭43卒)、新井裕二助手(昭45卒)、本島徳司助手(昭45卒)、入村哲也助手(昭48卒)がおり、他に数名の非常勤職員がいる。

三鷹周辺には、ゐるはな同窓会員もかなり多く活躍されており、日常診療にさいしては絶大の御支援を賜つてゐる。また年に一度は杏林のゐるはな会をもち旧交を温めてゐる。

なお杏林大学には、十周年を迎



杏 林 大 学

えた衛生検査技師養成の短期大学があり、検査部門の充実は大いに開拓の荒野にいはるはな多い。しかしそのあとは葉葉と繁るゐるはな芽を植えておきたい。新進の若い同窓生の雄飛を切望するものである。

(筆者は昭27卒)

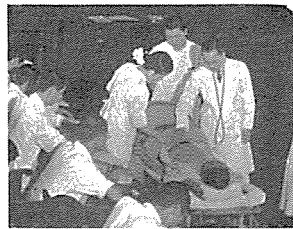


堂野前先生を偲ぶ

千葉大学教授(医学部肺研)
渡辺 昌平 (昭20卒)

昭和50年も残すところわずかと
なつた12月8日堂野前維摩郷先生
は、その高邁、真摯な生涯を閉じ
られた。前夜半、病状急変の電話
を受け、翌日伺つた時は、すでに
芦屋のご自宅で、温顔を湛えられ
たなきがらと永遠のお別れを申し
上げるほかはなかつた。

12月16日、吹田市千里会館で、
ご葬儀が行なわれた。寒い、風の
強い日であつた。葬送の邦楽につ
れ、先生の一生が物語り風に会場
に流れた。故人の遺徳を讃える参
列者は後を絶たなかつた。千葉か
らの多くのひとびとの悲しみの顔
がみえた。



ありし日の堂野前教授
の臨床講義

先生は昭和2年、東大稲田内科
から草創期の千葉医科大学佐々内
科の助教として着任された。30
才の若さで教授を助け、教室作り
に臨床面の補佐に、ドイツ留学を
ふくめ、内科臨床学の研究に、そ
の全精力を傾注された。学者とし
ての青春と壮年期を千葉の地に埋
めたといえようか。昭和16年第
2内科主任教授となられたが、呼
吸と循環についての業績は枚挙に
いとまなく、先生の「内科疾患と
季節」は内科学会宿題報告、「高血
圧の成因について」は循環器学会
特別講演、「病巣感染性心炎」は
内科学会会頭演説において実を結
んだ。

先生は生来、明敏で凡帳面、自
己に厳しく、しかも温情溢るる方
で、更に責任感の厚い人柄であつ

ことが決定、その最終講義は次の
言葉で結ばれた。「われわれは教
育、研究、診療を行ないつつ、常
に臨床医学を前進させねばならな
い。ここで何よりも優先するもの
は人命である。研究熱心の余り、
時には、この検査データーさえあ
ればと思うことがある。しかし
こと人命に危険ありやと予測され
る場合は、どんなにほしいもの
でもあきらめねばならない。」

いまかぎりない哀惜の渦の中で
先生のすぐれた足跡に報ゆるに、
ひたすらの努力を誓うものである

松本 胖教授
岡林 篤教授
合同退官記念式典
の細目決定す

長年にわたり学問の発展に、ま
た本学の繁栄に多大の貢献を果さ
れた松本 胖教授(神経精神医学
)および岡林 篤教授(第二病理
学)は昭和五十一年三月をもって
退官されるが、このたび両先生の
多年の御功績を讃えるため、きた

昭和四十九年十一月以来、本学
では新設講座や施設の設置および
既存講座の交替に伴ない、新たに
に次の方々が教授に就任された。
(敬称略、末尾の数字は発令年月
日、医学部庶務係調べ)

多田富雄(昭34卒)(環境疫学
研究施設疫疫研究部)(四九、一
一、一六)

稲垣義明(昭26卒)(内科学・
第三)(四九、一二、一六)

伊藤健次郎(昭15卒)(外科学

計 報

山崎武治・大正11年卒・昭和50年
5月死去・東京都新宿区市ケ谷佐
内町三一

小林孟彦・昭和4年卒・昭和50年
5月死去・松本市城西二一五・一七

大河内武・大正11年卒・昭和50年
6月死去・千葉市春日二一九・八

波多腰彪三・昭和4年卒・昭和50
年7月死去・東京都杉並区荻窪団
地五・一〇八

加賀山昇次・昭和5年卒・昭和50
年7月死去・東京都中野区中野三
一・二八・七

佐々 猛・昭和7年卒・昭和50年
7月死去・千葉市道場北一・三一

吉田六郎・大正11年卒・昭和50年
8月死去・宇都宮市星ヶ丘一・一七

若林 巖・昭和12年卒・昭和50年
8月死去・埼玉県加須市札羽一・一六

八〇

深沢増樹・昭和15年卒・昭和50年
8月死去・高崎市相生町四八

和爾忠隆・大正元年卒・昭和50年
10月死去・愛媛県周桑郡丹原町来
見一

和爾秀岳・昭和15年卒・昭和50年
12月死去・千葉県安房郡白浜町白
浜二六六

松本喜幹・昭和23年(専)卒・
昭和50年12月死去・横浜市鶴見区
市場西中町四一・一六

戸叶公明・昭和25年卒・昭和50年
12月死去・千葉県八千代市八千代
台北五八・一六

堀越 寛(独協医大放射線科教授)
昭和31年卒・昭和50年12月死去・

編集後記

東京葛飾区鎌倉一・二・三一
つしんで哀悼の意を表します
(なお他に御不幸を御存知でした
ら御一報願います)

まさになりふりかまわずにこの
「るの は な 同窓会報」を発行しな
ければならない。前号第五十五号
以来実に二ヶ年という月日がたつ
ている。この間には創立百周年記
念行事をはじめ、新病院建築の進
行、第三内科の新設を含めて数々
の人事移動があつた。それらをさ
ておいてもとにかく昭和五十一年
のニュースより会報を再刊するこ
とにしたのはあたらしい編集委員
達やむにやまれぬ決心のこと
、おそらく体裁や記事のとり上げ
方が不備でお叱りを受けることと
は思うがそれも覚悟の上、何が何
でも年四回の刊行を再現することに
全力をつくす方針である。もと
より暇な人は一人もない。ぎり
ぎり一杯の線で時間を生み編集を
することになっているが、多忙を
口にして言いがたはるが、多忙を
うかクラス会のことでも、思い出
でもお気づきの折におよそ願いた
い。なお本号は第五十七号となつ
ている。昨年十二月十日の常任理
事会の議により、「休刊中の記事
は木村康・前編集長の手で第五十
六号としてまとめられ全体として
時の流れを失わないようにするこ
と」になつてゐることを申し添え
る。

(村山 智)

次号(五十八号)は五月末に
発行の予定です。